

武漢大学留学報告

111062 田中翔子

● 到着時の心境

2015年3月2日、予定より1時間ほど遅れて武漢空港に到着し、迎えに来て下さった車で武漢大学へと向かいました。最初に感じた日本との大きな違いは、荒い運転と頻繁に鳴るクラクション、というのが正直なところで、車線変更や追い越しなど、怖いながらもスリリングで楽しく、遊園地のアトラクションのようでした。また、車窓から見える建物には看板がない代わりに壁に直接、赤く光る字で建物の名称が書いてあり、ここは日本ではなく中国なんだ、と強く実感しました。漢字から意味を推測したりして、期待と不安の入り混じった不思議な気持ちでスピードの速い車に乗っていたことを鮮明に覚えています。こうして始まった約4週間の武漢大学での留学について、簡単にご報告いたします。

● 武漢市・武漢大学

武漢空港から武漢大学まではかなり遠く、ずっと高い建物が立ち並んでおり、武漢市が思っていた以上のかかりの大都市であることを実感しました。武漢市は、長江と、長江にほぼ直角に交わる漢江という川により3つの区域（武昌、漢口、漢陽）に分かれています。武漢大学があるのは武昌で、中国最大の市街地内の湖である東湖と、そのすぐ隣に水果湖がある水辺の都会でした。大気汚染により空はいつもどんよりとしていた一方で、どの建物も色とりどりのLED照明がふんだんに使われていて、水面に反射して夜景がとても綺麗でした。



夜景



地下鉄（きれい）



東湖越しのメインキャンパス



武漢大学は医学部の他に法学部・建築学部・理学部・農学部などたくさんの学部のある総合大学です。医学部のキャンパスは、メインキャンパスとは湖を挟んだ場所に独立して存在し、うちの大学とほぼ同じか少し大きいぐらいの印象でしたが、メインキャンパスはかなり大きく、いくら歩いてもキャンパスから出られないのでディズニーランド 5 個分くらいあるのではないかと感じました。しかしそれほど広い武漢大学よりも広い大学が武漢市内にはいくつかあると聞き、中国のスケールの大きさにただただ圧倒されたのを覚えています。ちなみに正確には武漢大学の敷地は 389 平方キロメートルもあり、ディズニーランド 7 個分以上でした。

大学がそれほど大きい理由の一つに、ほとんどの学生が大学内の寮で暮らしていることが挙げられます。そのため大学内には食堂や銀行以外に、食品や飲み物、文房具やハンガー、ふとんなど生活用品を何でも売っている売店があります。メインキャンパスには八百屋さんや美容室まであり、大学内にいくつも街があるようでした。大学内で生活できると通学に無駄な時間もかからないし、忘れ物もすぐに取りに行けるし、環境にも優しいし、とても便利で良いことづくしで、日本も是非この制度を取り入れてほしいと思いました。





● 食べ物・昼寝

当たり前のことですが、食事は毎回中華料理でした。味付けはチンジャオロース以外は日本で食べる中華料理の味とは違いましたし、日本でいわゆる中華料理と呼ばれているメニューの物（中華丼、酢豚など）もあまり見かけませんでした。中華料理と一口に言っても中国は広いのでそれぞれの土地で違うのだ、という当たり前のことを改めて実感しました。滞在したホテルには調理器具が無かったので、私たちも他の学生同様に学生食堂で食事をとっていました。食堂は第一食堂、第二食堂の2つあり、それぞれ2階建なので、麺や炒飯、丼ものやカレーなどかなりの選択肢があり、どれも安くて美味しかったです。うちの食堂は美味しくない、と誰もが口を揃えて言うところは私たちの大学と変わらず、面白かったのですが、明らかに私たちの食堂より恵まれているように思えました。中国での食事は、辛い物が苦手だった私にはやはり時々つらいこともありましたが、次第に慣れ、最後には食堂のインドカレーを味わって美味しく食べられるまでに適応することができました。

中国では昼食後の休み時間が長く、各自の部屋に帰って昼寝をするという習慣がありました。寮が大学内にあるからこそその習慣だと思いましたが、働いている人も車で昼寝するそうで、車内に昼寝用の小さい枕を置いておくそうです。午後の効率が上がるので、そこまでの価値も十分あるように思えました。

● 研究室



私は MD-PhD コースで普段から薬理学講座でご指導頂いていることもあり、武漢大学でも基礎医学院の薬理学講座で同じような実験が出来れば、と思っていたのですが、実際の配属先は薬学院の薬物分析学講座でした。薬理学の方は人数があまり多くないということでそうなったようでした。初めはよく事態が飲み込め

ず、薬理学と大差ないだろうと思っていました。全員に研究テーマを質問した上で、興味のある人について実験を行うように言われたのですが、研究室の様子を見て研究内容を聞くにつれて、あまりの違いに愕然としました。薬理学では生体に対すると薬物の作用をみるため、自分で培養した細胞を用いた生物学的な実験がほとんどです。一方、今回の研究室には培養細胞もインキュベーターも顕微鏡もなく、機械と実験器具とパソコンが並んでいるばかりの化学的な空間でした。戸惑いました。

研究室には学部生・大学院生含め 20 人以上が在籍し、一人ひとりが自分のテーマを持って実験していました。全く馴染みのない内容の説明を英語で理解するのは難しかったですが、どなたも英語で書かれたパワーポイントを使って一生懸命に説明してくださったので、頭を全力で回転させて何とか概略を理解することが出来たという状態でした。



大半の人のテーマは一言でまとめると「混合物中から純粋な成分を効率よく分離する新しい方法の開発、または新薬のスクリーニング」でした。それぞれの人が独自の成分に注目し、テーマを持って実験しており、研究の発想力が優れていると感じました。私が就いて学ばせて頂いた王さんの研究テーマは糖タンパク質の分離方法の開発で、腫瘍マーカーとしてもよく使われている糖タンパク質を、生体から取り出した血液などのサンプル中から効率よく分離するために、糖タンパク質と結合する性質を持つレクチンを PTFE という



プラスチックの表面に付着させる方法、の開発でした。その方法で糖タンパク質がどの程度分離できたかは、HPLC（高速液体クロマトグラフィー）という手法を用いて評価しました。理論上は上手くいくものでも、なかなか上手くいかず、薬品の濃度などの細かい条件を試行錯誤する必要がありました。

私のような大半の医学部の学生は、血中の腫瘍マーカーの量を測定できているその技術に対して何の疑問も抱かず、有難いとも感じていないと思います。しかしこのように実際に一生懸命により良い技術にしようとして研究している人がいてこそその医学の進歩であるということを肌で実感することができました。医学部と看護学部しかない狭い世界の大学で4年間学んできたことで、知らないうちに視野が狭くなっていたのではないかと気付くことが出来ました。また、全く新しい考え方や概念の中で研究している方々から学ぶことの面白さにも気付くことができ、総合大学ならではの有意義で貴重な経験ができたのでかえって良かったと思っています。

留学の最後に研究室に提出した実験のレポートを本レポートの最後に添付します。

● 授業

武漢大学の医学部では中国の学生向けのコースとは別に留学生向けのコースもあり、タイやマレーシア、スコットランドやバングラディッシュといった多くの国からの留学生が勉強していました。私は留学生向けの2年生の薬理学の授業に出席させていただきました。授業は英語で行われていましたが、概論がしっかりしていて理解が深まりやすく、学生たちが先生の問いかけに対し積極的に発言しているのが印象的でした。また、日本と比べて反応が正直で、面白い授業は真剣に聞く一方、つまらない授業では私語が多く出席人数が少ないという差がわかりやすいようにも感じました。

● 出会った人々

昨年度に武漢大学へ留学された先輩方の築いてくださった友好関係にかなり助けられた部分も多く、彼女たちがとても親切にしてくれたおかげで楽しく充実した毎日を過ごすことが出来ました。彼女たちはいつも明るく元気で、思ったことをはっきり言うのが日本人とは違って面白かったです。互いの国の文化について話をしたり、好きな音楽を教えてもらったり、民族衣装を着せてもらったり、と国際交流が出来ました。



インドとタイの民族衣装

また、日本語を勉強している中国人の学生も多いことにも驚きました。彼らが積極的に私たち日本人に会いに来てくれたおかげでたくさんの中国人学生とも仲良くなることが出来、有難かったです。彼らに日本語を勉強している理由を聞くと、ほとんどの人が日本の漫画やアニメが好きだから、と答えたのも衝撃的でした。日本人である私たちよりもはるかに詳しく、話に置いていかれる場面も多々ありました。

武漢大学には部活やサークルはありませんでしたが、それぞれが自主的に日本語を学んだり医学の勉強をしていて、その積極性を私も見習わなければならないように思います。



ホテルでお向かいのお部屋だった、留学生の引率で長年インドと武漢を行き来しているインド人医師の先生ともお話しすることが出来ました。インドの考え方なのかその先生の考え方なのかは分かりませんが、とにかく人生は楽しむことが大事だ、自分の正しいと思ったことをしなさいという人生観にはハッとさせられました。

また、武漢大学と本学の友好関係は長く、来福経験のある先生方も多いことから、様々な先生方に大変歓迎していただきました。客人を大切に扱い、もてなす心は日本より遥かに強く、良い文化だと感じました。美味しいご飯をご馳走になったり、観光に連れて行って下さったりと大変お世話になりました。またそうした先生の紹介で若い医師の先生方とも知り合うことが出来たり、大学病院の院長先生ともお会い出来たり、とより充実した経験をする事が出来ました。

私たちが武漢で親切にして頂いた数えきれないご恩を、これから日本に留学や旅行でいらっしゃる方に少しずつでも間接的にお返しして行きたいと思っています。



武漢大学中南病院の院長先生と



解剖学講座の先生方と



長江のほとりで昨年来学された先生と

● まとめ

約一か月間の中国滞在、研究室での勉強、様々な人との出会いを通じて、日本で暮らしているだけでは学びえない沢山のことを学ぶことが出来ました。普段と違った環境での生活は日本や自分自身について見つめ直す契機にもなり、新たな発見も多かったように思われます。国際的な視野を持つことが出来るようになり、掛け替えのない経験となりました。このような機会を与えて下さった全ての方々、特に関根先生や企画財務課の國分様に深く感謝しております。この経験を今後の人生に生かして頑張っていきたいと思います。